

- [Global Press](#)

日本とこんなに違う！子どもにあわせて選ぶベルギーの学校

[川崎陽子](#)

2011年10月26日

9月1日、ベルギーの二次学校(日本の中高一貫校に相当)に息子が入学した。日本の中学校の入学式とはなんたる違いだろう。クラス担任について 入った体育館では、国旗も国歌斉唱も来賓挨拶もなく、校長の挨拶とサンドイッチや飲み物の朝食会だけが待っていた。一次学校（日本の小学校に相当）の時と同様親子ともほとんどが普段着。女生徒の中には、化粧をして派手なピアスなどの装飾品で着飾っている子が何人かいた。

だが、実際の教育政策の違いは入学式の比ではない。



公立一次学校の校庭

ベルギーは、オランダ語とフランス語の二つの公用語に1963年からドイツ語が加わった多言語国家だ。義務教育は18歳までで、6年制の一次学校、6年制（一部7年）の二次学校からなる。1988年の憲法改正により、国の所轄事項であった教育政策は、3つの言語共同体がそれぞれ独立して責任を負うことになった。すなわち、中央集権体制の日本とは異なり地方主権である。

子どもと学校の関係も根本的に違う。日本では、学校が成績や入試によって子どもを選抜するので、熾烈な点取り競争の中で、子どもの個性、自主性、適正は十分に考慮されない。一方ベルギーでは、入試は大学や学部学科の一部にあるだけで、義務教育では全員が希望する学校に入ることができる。また、途中で学校を移ることも容易である。

もう1つ特徴的なのは落第制度だ。この制度は一次学校の1年生から始まり、基準に達しない生徒は進級できない。学級で補助教員が面倒をみても落第を避けられない場合は、学習進度の遅い学校に移るという選択肢もある。入学の機会は平等に与えられ、その後の生徒の到達度によって、次の段階の教育や学校が選ばれるのだ。他の子と比較競争することはない。

二次学校では、子どもの適性を子ども自身に理解させ、自主的に進路を決める手助けをする仕組みが出来ている。そのような具体例を、息子と共に経験した二次学校選びの一年間を振り返りながら紹介してみたい。

■子どもに任される学校選択

我が町の卒業生の多くは、通学に便利な進学系2校と職業系1校の中から選ぶ。進学系の2校は、私立の厳格なカトリック系P校と、「王立教育施設」という名の公立A校だ。私立といっても、ベルギーのすべての学校は1世紀近く前から無料である。職業系のS校では、15歳から実際の職場での実習を始めることもできるので、大学に進学しない子が多い。

進学校を選ぶ際、学校のレベルは必ずしも重視されない。P校は、2009年度PIISA(OECD加盟国の15歳児を対象とした学習到達度調査)の結果、ベルギー国内でもトップレベルで、欧州一のフィンランドを凌ぐ好成績を達成した名門校だ。日本だったら優秀な子は全員P校を志望しそうだが、わが町の成績上位者のほとんどはA校を選択した。

学校選びで子供の希望が最優先されるという好例がある。息子のクラスメイトの1人は、5年生の時の「農家で丸一日体験学習」のおかげで「将来は農業をやる」と決めていた。だが、ドイツ語共同体の二次学校には農業の専門校がないので、寄宿舎に入ってフランス語共同体の学校に通っている。

一方で、親の価値観が学校選びに現れることもある。

「上の子は勉強好きで野心があるので生徒の自主性に任せるP校、下の子は面倒見が良いA校に通っている。」

「P校の厳しい授業についていったほうが大学に入ってからが楽。A校で楽をしていたら、大学で苦労する。」

「子どもはS校で技能を身につけたいと言うが、不良が多いという噂が心配なので、最初はP校かA校に行かせ、思春期が過ぎて落ち着いたら転校させる。」

一次学校の校長はこう語ってくれた。「今ドイツのアーヘン工科大で機械工学を専攻している息子は、まずP校で3年間みっちり数学をたたきこんで、残りの3年間はS校で思う存分機械いじりの実習をしたのです。おかげで、目的の大学と学科で学ぶための理想的な準備ができたと、非常に満足しています。また、私の娘は小さい頃から自然科学系志望でしたが、P校で語学分野に向いていることがわかりそっちを伸ばすことにしました。どこの二次学校でも最初の2年間は、子ども自身が

自分の得意分野を理解する手助けをしてくれますから、学校の選択は子どもに任せておけば心配いりませんよ。」

進学系・職業系どちらの学校でも卒業前に、大学進学資格試験を受けられる。ベルギーでもドイツでも、一部の大学の特定の学部学科にしか入試や成績による選抜はなく、資格試験さえ通れば、希望どおりの大学・学部学科に入学できる。校長の息子が、ベルギーの職業系を卒業してドイツの一流大学で機械工学を学んでいるように、どの学校で資格を取得したかは関係ない。



🔍 青少年の家

我が息子はといえば、手に職をもってほしいという私の願いとは裏腹に職業系に行く気はなく、学校説明会の後もP校とA校の間でずっと迷っていた。最終的に、P校では嫌いな音楽の授業が必修だし、宗教の授業はカトリックとプロテスタントしかないが自分はモラル（道徳・倫理）を選択したいからと、A校を選んだ。クラス内で孤立しないように、仲良しの子と同じクラスにする等の配慮もあり、今のところは満足しているが、今後6年間の状況によっては転校することも考えている。

■教師と学校の裁量に任された教育と優れた成果

このほかにも、日本からみて珍しい点はいろいろとある。

例えば、教師に大きな裁量を与えている点だ。教育省は各学年のおおまかな達成目標だけを通達し、教師が自由に教材を選ぶ。ベルギーにはドイツ語の教科書がないので、ドイツやスイスの教材から選ぶこともあるそうだ。青少年向けの麻薬小説や原発事故小説を国語教材に使う進学校もあり、小説の続きを書かせたりもする。教科書検定や学習指導要領などとは無縁の世界である。また、隣接する二つの小さな町の公立一次学校で、成績表のつけ方が片方は100点満点でもう一方は10点満点と異なっていたりもする。

二次学校になってからは、テストの大部分が記述式になった。「直線とは何か」、「規則はなぜ必要か」、「水が気体になることを調べる実験方法を書け」など、考えて書かせる設問ばかりだ。文章や図でぎっしりと書かれた答案の採点を教師がこなせるのは、少人数学級のおかげだろう。

ヨーロッパらしく、宗教教育への配慮も行き届いている。公立学校では、1879年の教育基本法によりモラルか宗教を自由に選択できるようになった。たとえ生徒の9割以上がカトリック教徒でも、宗教の授業では5つの宗教（カトリック、プロテスタント、ユダヤ教、正教、イスラム教）とモラルから選択でき、希望者がたった一人でも授業が行われる。

ベルギーの子ども本位のユニークな教育は、かなりの好結果を生んでいる。高等教育が世界的に高い水準にあることは、大学の研究という指標で比較した2011年世界大学学術ランキングからみてとれる。総人口1000万人のベルギーに20校足らずしかない大学から、100位以内に1校、200位以内では4校、300位以内では6校が入っている。（日本の大学はそれぞれ5校、9校、10校だった。）

だが、なによりも一番の教育の成果は、自分で選んだ学校に満足し目を輝かせて嬉しそうに通う子どもたちの姿であろう。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.